
大学生の身体像と意識

富永徳幸, 田口節芳

Body image and consciousness of university student

Noriyuki TOMINAGA, Setsuyoshi TAGUCHI

1. 緒言

瘦身願望の若年層女子の増加傾向が指摘^{1),2)}されている。マスコミに露出するタレントやモデルに象徴される 戦略的に作られた「スタイルの良さ」を無条件に受け入れているかのようなようである。かかる基準を達成し、自己価値を高めようとする志向は、痩せることや身体の形への強い関心や執着へ繋がると考えられる。瘦身願望の強さが摂食障害、体調不良等を引き起こし、身体の発達に悪影響を及ぼすことは既に指摘されている^{3),4)}。しかし一方では、痩せてオシャレをすることで自分に自信がもてる、あるいは他人が好意を抱いてくれるようになるといったメリットへの期待から、痩せる行為への抵抗感は薄れ、スリム賞賛の傾向すら見受けられる。

若者たちは自己の「身体の形」をどのように捉え、評価しているのだろうか。また、その評価と彼らの健康意識とはどのような関連が見られるのだろうか。体型評価への過剰反応（過大評価、過小評価）の有無や、体型評価と身体に関する意識との関連性の分析は興味深い。

以上のような関心から、本研究では、大学生の身体に関する主観的体型評価（イメージ）と性差に着目して、身体意識、健康意識との関連性について考察した。

近畿大学工学部教育推進センター

Center for the Advancement of Higher Education,
Faculty of Engineering, Kinki University

2. 方法

2.1 分析の視点

若年層における瘦身願望の特徴の一つに、自己体重(体型)の過大評価が挙げられよう。例えば標準体重(体型)であるのに、他者の眼差しへの過剰反応からより太いと思いつむ。こうした意識(主観的評価)と現実(客観的評価)のずれがストレスを生む。

本論では、シルエットチャートによる主観的体型評価と性差に着目し、BMI(客観的体型評価)、身体意識(社会的体格不安尺度、身長・体重・身体に関する意識)、健康意識との関連性を検討した。

2.2 諸概念

2.2.1 シルエットチャートによる主観的体型評価

自分の体型が他人の眼にどのように映っているのかは、瘦身願望が強い若者たちにとって、日常生活の意識や行動に大きく影響する問題である。かかるイメージは、体重や身長といった各部位の数値以上に、「全体的な形」として印象付けられる。一体、彼らは自己の身体像をどう捉えているのだろうか。江田は16段階の体型モデル図を数値化する尺度でボディ・イメージの評価を検討している⁵⁾。本研究ではこのシルエットチャートを援用し、自己の体型に最も近いものを選択することで主観的体型評価とした。

2.2.2 社会的体格不安尺度 (Social Physique Anxiety Scale)

自分の体格は他人にどう思われているかという認識は、ダイエットなどの食事制限を促したり、日常の活動を消極的にさせたりする。これらのことから、他人が自分の身体を評価することが不利な結果をもたらす可能性があるという認識について検討する必要性が指摘できる。

社会的体格不安尺度(以下SPAS)は、自らの体型を他人がどのように観察し評価をするのかについて不安になる程度を測定するために、Elizabethらによって開発された。磯貝はこれを翻訳・修正し、妥当性を検討している⁶⁾。本研究ではSPAS(12項目)を援用した。

2.2.3 身長・体重・身体に関する意識 (Body Image Questionnaire)

自己の身体像を把握するためには、シルエットチャート等による体型評価も意義深い。自己の身体(体型)への自信の有無や程度といった身体への意識の分析も併せて有用である。遠藤はHuddyによる身長、体重、身体に対する意識(以下BIQ)を邦訳・検討している⁷⁾。本研究ではこれらBIQ(20項目)を援用した。

2.2.4 摂食行動

体型形成の一要因として食行動（習慣）が挙げられる。我々が生命を維持するためには食（栄養摂取）は欠かせない。その食が血や肉、骨となり体をつくり上げる。残念ながら、自分の体重を過大評価し痩身を「是」とする痩せ願望が発育発達に悪影響を与えるばかりでなく、摂食障害や健康問題も引き起こしていることは国民の知るところである。

遠藤は食行動を①摂食の抑制、②過剰間食、③食事に関する肯定的関心、④社会的摂食、⑤食統制の欠如などの5領域で分析している⁸⁾。本研究ではこれらを援用し摂食行動について検討した。

2.2.5 健康意識

徳永は健康度・生活習慣診断検査において、健康度の尺度として①身体的健康度、②精神的健康度、③社会的健康度、④食事の規制などを挙げている⁹⁾。本研究ではこれら12項目を援用して健康意識を検討した。

2.3 研究仮説

前節を踏まえて本論では次の仮説を導いた。

「主観的体型評価や性別によって SPAS、BIQ、BMI、摂食行動、健康意識には差異がある」

2.4 分析の方法

2.4.1 調査

- ①調査方法 質問紙による配票調査法
- ②調査時期 平成23年11月15日から30日まで
- ③調査対象 広島県内の大学生 260名
- ④調査内容 シルエットチャート、SPAS、BIQ、BMI、摂食行動、健康意識

2.4.2 データの分析

(1) シルエットチャートによる主観的体型評価

シルエットチャート（図1参照）の中から自分の体型に最も近いイメージを1から16までの16段階尺度で回答を得た。この得点が高いほど体型が太いと感じていることを示す。

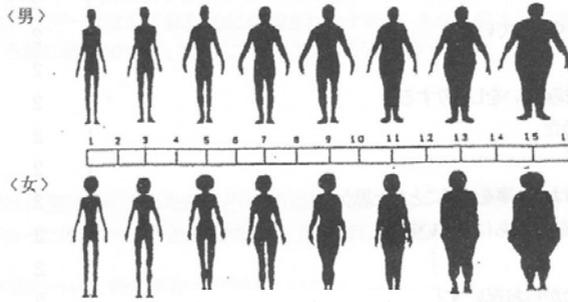


図1 シルエットチャート

(2) 社会的体格不安尺度 (SPAS)

表1 社会的体格不安尺度の質問項目

-
- Q1 自分の体型について特に不安は感じていない
- Q2 やせすぎ、或いは太りすぎにみえる服を着ても全然気にならない
- Q3 自分の体型を気にしなくて良かったよいなあと思う
- Q4 自分の体重や筋肉のつきぐあいのことで他人にあまり良く評価されてないと思うことがしばしばある
- Q5 鏡をみてなかなか良い体型だと思う
- Q6 時々自分の体型の悪さが気になって仕方がないことがある
- Q7 他人と一緒にいると自分の体型が気になってしまう
- Q8 自分の体型がどんなふうに他人の目に写っているのが特に気にしない
- Q9 自分の体型について他人が何か知っていることが分かったら嫌な気がする
- Q10 体型のはっきりするような格好をするのは恥ずかしい
- Q11 自分の体型が他人にみられていることがはっきり分かっても落ち着いていられる
- Q12 水着を着ると体型が気になる
-

質問に対して「大いにそう思う」から「まったくそう思わない」までの4段階尺度で回答を得た。さらに肯定の度合いが強い順に「4」から「1」へ得点化した。Q1, 2, 5, 8, 11は逆転項目である。12項目の合計得点が高いほど社会的体格不安が大きいことを示す。

(3) 身長・体重・身体に関する意識 (BIQ)

表2 BIQ質問項目

-
- | | |
|-----|------------------------------|
| Q1 | 体重は身長に対してバランスが良い |
| Q2 | 私はとても重い |
| Q3 | 自分の身体について良いイメージを持っている |
| Q4 | 身長がもっと高ければいいと思う |
| Q5 | 自分の体重に満足している |
| Q6 | 私の太ももは太い |
| Q7 | 自分の全身を鏡で見たときそれに満足する |
| Q8 | 私のウエストの周りには脂肪がたくさんついている |
| Q9 | 人に見られたときに好感を与えられるという自信がある |
| Q10 | 脂肪を落とすことが出来たら私の身体へのイメージは良くなる |
| Q11 | スポーツへの参加は私に理想的な身体イメージを与えてくれる |
| Q12 | 私は体重を落としたい |
| Q13 | 私は食事に気を使う |
| Q14 | 私はもっと筋肉を増やしたい |
| Q15 | 運動することはより良い身体を与えてくれる |
| Q16 | 理想的な身体イメージを持つことは重要である |
| Q17 | 太り過ぎということと何か成功するということとは関係がない |
| Q18 | 運動している人の体型はしていない人よりも見た目が良い |
| Q19 | 自分の身体の基本的なタイプはあまり変化しない |
-

質問に対して「大いにそう思う」から「まったくそう思わない」までの4段階尺度で回答を得た。さらに肯定の度合いが強い順に「4」から「1」へ得点化した。Q2, 4, 6, 8, 10, 12 は逆転項目である。19 項目の合計得点が高いほど自己の身体に関して良いイメージを持っていることを示す。

(4) 摂食行動

質問に対して「とても良く当てはまる」から「全然そんなことはない」までの5段階尺度で回答を得た(表3参照)。さらに肯定の度合いが強い順に「5」から「1」へ得点化した。

表3. 摂食行動の質問項目

-
- Q1 私は意識して食事を制限している
- Q2 私はいろんな食べ物のカロリーについて良く知っている
- Q3 間食は私にとっては大問題だ
- Q4 私はテレビを見ながら間食を取ったり、つまみ食いをしたりする
- Q5 私は昼食と夕食の間に食べ過ぎてしまうようだ
- Q6 私は退屈すると食べ物に手が出てしまう
- Q7 私にとって一日の中で最も満足できる活動は、食事をすることだと思う
- Q8 私は毎回の食事のことを考えて、その食事を心待ちにしている
- Q9 食事をしているとき私は気分が落ち着く
- Q10 私は重要なイベント(誕生日)を外食しながらお祝いするのが好きだ
- Q11 映画やスポーツ観戦のときには軽食を買う
- Q12 私は食べ物がおいしいと感じなくなっても、食べ続けることがある
- Q13 私は食べることへの強い衝動をコントロールできず、吐き気を感じるまで食べ続けてしまう
- Q14 私は普段よりも休日や長期休暇のときにたくさん食べる
-

摂食の抑制(Q1, 2, 3), 過剰間食(Q4, 5, 6), 食事への肯定的関心(Q7, 8, 9),
社会的摂食(Q10, 11), 食統制の欠如(Q12, 13, 14)

本論では、まず主観的体型評価を独立変数とし、従属変数である SPAS, BIQ, BMI, 摂食行動, 健康意識との関連性について検討(一元配置分散分析による)した。次に性別を独立変数とし, SPAS, BIQ, BMI, 摂食行動, 健康意識との関連性について検討(t検定による)した。更に主観的体型評価各群と従属変数との関連性における性差の有無について検討(t検定)した。なお, 主観的体型評価については, シルエットチャートより 16 段階尺度で得た回答を 1~3, 4~6, 7~9, 10~12, 13~16 の 5 群に分類し, 各々を痩せ群 (I 群), 痩せ気味群 (II 群), 普通群 (III 群), 太り気味群 (IV 群), 肥満群 (V 群) とした。統計解析には SPSS12.0J for windows を使用した。

3. 結果

3.1 主観的体型評価群における差異

表1及び表2は従属変数（SPAS, BIQ, BMI, 摂食行動, 健康意識）のスコアに群間差異が認められた項目を表す。表1はスコア平均, 標準偏差を, 表2は一元配置分散分析及び多重比較の結果を表す。

表1 主観的体型評価各群の平均及び標準偏差

		I	II	III	IV	V
SPAS	M	31.96	28.76	32.26	35.61	36.07
	SD	7.09	5.78	6.37	5.66	6.39
BIQ	M	46.96	48.55	44.79	40.15	41.53
	SD	6.32	6.98	7.10	6.20	7.07
BMI	M	17.95	19.27	20.50	21.91	24.76
	SD	1.39	1.98	2.56	2.62	4.91
摂食の抑制	M	4.71	5.60	6.38	6.37	6.40
	SD	2.55	2.88	2.60	2.27	2.82
食への肯定的関心	M	6.04	7.62	7.93	7.33	7.47
	SD	2.46	2.75	2.76	2.96	2.50
身体的健康	M	11.33	14.33	13.14	13.15	10.80
	SD	3.21	4.04	3.24	3.09	2.18
社会的健康	M	11.50	13.00	12.11	13.13	9.36
	SD	3.86	3.60	3.72	3.56	2.59
食習慣	M	24.71	28.45	27.21	29.04	26.27
	SD	5.93	5.66	6.14	5.88	5.55

I : 痩せ群, II : 痩せ気味群, III : 普通群, IV : 太り気味群, V : 肥満群

表2 群間の差異(一元配置分散分析)

(df = 4,253)	F	p	多重比較
SPAS	7.98	.05	II < I, III < IV, V
BIQ	9.80	.05	V, IV < III < II, I
BMI	21.61	.05	I < II < III < IV < V
摂食の抑制	2.67	.05	I < II, III, IV, V
食への肯定的関心	2.51	.05	I, IV, V < II, III
身体的健康	4.97	.05	V, I < III, IV < II
社会的健康	3.64	.05	V, I < III, II, IV
食習慣	2.59	.05	I < II, IV

I, II, III群よりIV, V群の方が SPAS が有意に高く ($F(4, 253, .05)=7.98$), BIQ が有意に低い ($F(4, 253, .05)=9.80$). また, BMI は I 群から V 群へと順次有意に増加している ($F(4, 253, .05)=21.61$). 各自の BMI と体型の評価は一致しており, 自己の体型を太いと評価している学生ほど体格不安が強く, 自己の体に対して否定的なイメージを持っていることが示唆される.

摂食行動では II 群, III 群が他の群より有意に食への肯定的関心が高い ($F(4, 253, .05)=2.51$). I 群は他群より有意に摂食の抑制が低い ($F(4, 253, .05)=2.67$). また I 群は II 群, IV 群より有意に食習慣が好ましくない ($F(4, 253, .05)=2.59$). このことから, II 群, III 群などの中庸群は食べたいものを食べ, 食に関して比較的肯定的に捉えていることが示唆される.

健康意識についてみると, II 群, III 群, IV 群より I 群, V 群の方が有意に身体的健康度 ($F(4, 253, .05)=4.97$) 及び社会的健康度 ($F(4, 253, .05)=3.64$) が低い. 体型評価が痩せや肥満 (太いか細い) である学生ほど健康的でないことを認識していることが示唆される. 以上の結果は仮説を支持するものである.

3.2 性別における差異

表 3 は従属変数 (SPAS, BIQ, BMI, 摂食行動, 健康意識) のスコアに性差が認められた項目を表す

表3 性別における差異

(df=258)		Male	Female	t	p	
主観的体型評価	M	7.09	8.28	3.30	0.05	M<F
	S D	2.92	2.70			
S P A S	M	28.89	34.42	7.11	0.05	M<F
	S D	5.54	6.22			
B I Q	M	47.51	42.97	5.01	0.05	M>F
	S D	7.25	6.84			
B M I	M	21.54	19.97	4.15	0.05	M>F
	S D	3.14	2.77			
摂食の抑制	M	5.50	6.45	2.81	0.05	M<F
	S D	2.82	2.47			
過剰間食	M	7.20	8.68	3.97	0.05	M<F
	S D	2.86	2.90			
食事の規則性	M	7.22	8.31	2.56	0.05	M<F
	S D	3.21	3.30			

主観的体型評価 ($t(258, 0.05)=3.30$), SPAS ($t(258, 0.05)=7.11$) は有意に女子の方が高く, BIQ ($t(258, 0.05)=5.01$) と BMI ($t(258, 0.05)=4.15$) は有意に男子の方が高い. 女子の方が男子より自分の体型を太いと評価し, 体格不安が強く, 身体に否定的なイメージを持っていることが示唆される. しかしながら, BMI は

有意に女子の方が低いことから、女子が自己の体型に関して過剰に意識している様子が見て取れる。

一方、摂食の抑制 ($t(258, 0.05)=2.81$)、過剰間食 ($t(258, 0.05)=3.97$)、食事の規則性 ($t(258, 0.05)=2.56$) についてはいずれも女子の方が有意に高い。摂食の抑制をし、規則正しさにも配慮しているにもかかわらず間食の誘惑に負けているということなのだろうか。あるいは自己の過剰間食を認識しているが故に、規則正しさや摂食の抑制を志向しているのであろうか。いずれにしても矛盾を孕んだ状況である。

3.3 主観的体型評価と性差との関連性

ここでは、主観的体型評価各群の SPAS、BIQ、摂食行動、健康意識にどのように性差が現出するかを検討した。具体的には各従属変数について I～V 群のスコアを性別間で比較 (t 検定) した。次の 4 変数において各群のスコアに性差が認められた。

3.3.1 SPAS

表4-1 主観的体型評価群別の性差 (SPAS)

		Male	Female	df	t	
I	M	30.25	33.67	22	1.19	ns
	SD	4.07	9.06			
II	M	27.67	29.86	40	1.24	ns
	SD	4.35	6.87			
III	M	27.84	34.49	129	6.48	M<F
	SD	6.17	5.21			
IV	M	32.10	36.58	44	2.32	M<F
	SD	4.33	5.65			
V	M	33.60	37.30	13	1.06	ns
	SD	5.27	6.78			

表 4-1 は SPAS スコアにおける群別の性差を表す。III 群 ($t(129, 0.05)=6.48$) と IV 群 ($t(44, 0.05)=2.32$) において女子の方が有意に高い。前項 (表 3) においても SPAS スコアの性差 (女子が有意に高い) が認められたが、ここでは III 群、IV 群についてのみ差異が認められる。即ち、一般的に女子は男子より体格不安が強い傾向にあり、更に自己の体型を太いと評価している女子学生の体格不安の強さが顕著であることが示唆される。

3.3.2 BIQ

表4-2 主観的体格評価群別の性差 (BIQ)

		Male	Female	df	t	
I	M	49.58	44.33	22	2.20	M>F
	SD	4.68	6.82			
II	M	50.24	46.86	40	1.60	ns
	SD	5.02	8.28			
III	M	48.25	43.03	129	4.22	M>F
	SD	7.13	6.45			
IV	M	40.10	40.17	44	0.03	ns
	SD	7.56	5.89			
V	M	39.40	42.60	13	0.82	ns
	SD	7.54	6.98			

表4-2はBIQスコアにおける群別の性差を表す。I群($t(22, 0.05)=2.20$)とIII群($t(129, 0.05)=4.22$)において男子の方が有意に高い。前項(表3)においてもBIQスコアの性差(男子が有意に高い)が認められたが、ここではI群、III群についてのみ差異が認められる。即ち、一般的に男子は女子より肯定的な身体イメージをもつ傾向にあり、更に自己の体型を痩せているあるいは普通であると評価している男子学生の身体イメージがより良好であることが示唆される。

3.3.3 BMI

表4-3 主観的体格評価群別の性差 (BMI)

		Male	Female	df	t	
I	M	18.56	17.34	22	2.35	M>F
	SD	1.32	1.23			
II	M	20.22	18.32	40	3.51	M>F
	SD	2.08	1.35			
III	M	21.52	19.98	129	3.38	M>F
	SD	1.69	2.77			
IV	M	23.64	21.43	44	2.49	M>F
	SD	2.58	2.46			
V	M	30.21	22.04	13	5.00	M>F
	SD	3.45	2.74			

表 4-3 は BMI スコアにおける群別の性差を表す. すべての群において男子の方が有意に高い ($t(22, 0.05)=2.35$), ($t(40, 0.05)=3.51$), ($t(129, 0.05)=3.38$), ($t(44, 0.05)=2.49$), ($t(13, 0.05)=5.00$). 前項 (表 3) においても BMI スコアの性差 (男子が有意に高い) が認められたが, ここでは更に全群について差異が認められる. 即ち, 自己の体型評価に関わらず男子の方が女子より BMI が高いことが示唆される.

3.4 摂食行動 (過剰間食)

表 4-4 主観的体格評価群別の性差 (過剰間食)

		Male	Female	df	t	
I	M	6.92	7.73	21	0.69	ns
	SD	2.28	3.29			
II	M	7.00	8.86	40	1.97	ns
	SD	2.93	3.17			
III	M	7.25	8.71	129	2.85	M<F
	SD	2.81	2.75			
IV	M	6.60	8.36	44	2.69	M<F
	SD	2.88	2.92			
V	M	9.40	9.40	13	0.00	ns
	SD	4.16	2.95			

表 4-4 は摂食行動 (過剰間食) スコアにおける群別の性差を表す. III 群 ($t(129, 0.05)=2.85$) と IV 群 ($t(44, 0.05)=2.69$) において女子の方が有意に高い. 前項 (表 3) においても過剰間食スコアの性差 (女子が有意に高い) が認められたが, ここでは III 群, IV 群についてのみ差異が認められる. 即ち, 全般的に女子は男子より過剰間食傾向にあり, 更に自己の体型を普通あるいは太り気味と評価している女子学生の過剰間食傾向が強いことが示唆される.

4. 考察

前述のように, 主観的体型評価や性別によって SPAS, BIQ, 摂食行動, 健康意識には差異が認められた. これらは本研究の仮説を支持する結果である.

本研究では更に, 主観的体型評価各群の SPAS, BIQ, 摂食行動, 健康意識にどのように性差が現出するかを検討した. この主観的体型評価と性差の関連は興味深いものがある. 例えば, SPAS と性差との関連のみの分析では, 全体的には女子が有意に高かった. しかし, 主観的体型評価を加味した分析では, 性差はすべての群に現出せず, III 群と IV 群に限定された. 即ち, 自己の体型を痩せあるいは

痩せ気味であると評価した群（Ⅰ，Ⅱ群）では体格不安の程度に性差はなく，太り気味あるいは普通と評価した群（Ⅳ，Ⅲ群）に限って女子の体格不安が男子より強いのである．かかる2群の性差が全体の性差に反映していることから，この2群における性差は顕著であると解釈できよう．

また，BIQ と過剰間食（摂食行動）においても性差の現出は限定された．BIQ では，痩せあるいは普通と評価した群（Ⅰ，Ⅲ群）に限って男子の身体イメージが女子より良好であった．また，過剰間食では太り気味あるいは普通と評価した群（Ⅳ，Ⅲ群）に限って女子の過剰間食傾向が男子より強かった．これらも同様に解釈できる．

一方，BMI ではすべての群において男子学生の BMI が有意に高かった．自己の体型を肥満と評価した群でも，女子の BMI は男子より有意に低いのである．女子は自己の体重の軽重にかかわらず体型評価に関して過大評価をしていると推測できよう．

体格不安の強さや過剰間食傾向が女子の特定の群に顕著であったこと，また自己の体重に関わらず体型を過大に評価していると推測できることなどから，女子が自己の体型評価に過敏になっている様子が見て取れる．

5. 結語

本論は大学生の身体に関する主観的体型評価（イメージ）と性差に着目して，身体意識，健康意識との関連性について検討することを目的とした．広島県内の大学生 260 名を対象として，質問紙を用いた配票調査を実施した．その結果は次のように整理される．

（1）全体的特徴

①主観的体型評価と BMI は一致しており，自己の体型を太いと評価している学生ほど体格不安が強く，身体に否定的なイメージをもっている．

②主観的体型評価が中庸（Ⅱ群，Ⅲ群）である学生は食べたいものを食べ，食に関して肯定的に捉えており，身体的・社会的健康度も高い．

③女子の方が男子より自己の体型が太いと評価し，体格不安が強く，身体に否定的なイメージをもっている．BMI は男子の方が高いことから，女子は自己の体型に過剰に反応していると推測される．また，女子の方が摂食の抑制をし，食事の規則性を重視するものの，過剰間食の傾向が見られる．

（2）主観的体型評価各群における性差の特徴

①自己の体型を太いと評価している女子学生の体格不安の強さが顕著である．

②自己の体型を普通または痩せと評価している男子学生の肯定的な身体イメージの強さが顕著である．

- ③自己の体型評価に関わらず女子学生のBMIが低い。自分の体重が重くても軽くても常に女子学生は体型評価に過剰反応している様子が見て取れる。
- ④自己の体型を太り気味あるいは普通と評価している女子学生の過剰間食傾向が顕著である。

「謝辞」

本論の調査実施（データ収集）は学生諸君（有本君、一法師君、松井君、大畠君、園田君、小松君、久崎君）の協力を仰ぐことにより実現しました。末尾ではありますが、ここに深謝する次第です。

「参考文献」

- 1) 健康・栄養情報学会編, 国民栄養の現状, H14年厚生労働省国民栄養調査結果, 第一出版, 58, 2004
- 2) 我部山他, 思春期女子の食生活とダイエットの関係-小・中学生の調査から-, 思春期学, 23, 142-153, 2005
- 3) 井上他, 女子高校生及び短大生における細身スタイル志向と食物制限の実態について, 栄養学雑誌, 50, 355-364, 2004
- 4) 小沢他, 発育期のダイエット, 体育の科学, 53(3), 172-178, 2003
- 5) 江田, 大学生のボディ・イメージと食習慣について, 人間環境学会, 6, 41-50, 2006
- 6) 磯貝浩久, 社会的体格不安の測定に関する研究, 九州工大情報工学部紀要, 7, 人文社会科学篇, 9-19, 1994
- 7), 8) 遠藤他, 大学生が持つ自己の身体に対する意識の分析, 日本体育学会大会号 (54) 遠藤他, 258, 2003
- 9) 徳永幹雄, 健康度・生活習慣診断検査, 体育・スポーツの心理尺度, 192-193, 2004